

魔法の Wallet プロジェクト 活動報告書

報告者氏名：日置晋平 所属：大阪府立交野支援学校 記録日：2020年 2月 19日

キーワード：ダウン症 知的障害 読字 音韻認識 文字入力 視覚支援 動画教材

【対象児の情報】

・学年 小学部 4年生

・障害名 ダウン症 知的障害 肢体不自由

・障害と困難の内容

ひらがなの50音はほぼ読めている。単語や文章を読むには一文字ずつ指さしながら読んでいる。

書字の練習をしているが上達にスピードは遅い。

口頭での指示でも理解できることは多いが、作品制作など細かい内容は理解するのに時間がかかる。

眼鏡を使用しているが、眼鏡を使用しても 0.2 くらいの視力しかない。

新版 K 式発達検査 2001(平成 31 年 2 月 28 日実施)

全領域(DQ)31 発達年齢(DA)3 歳 1 ヶ月

姿勢・運動領域 DQ17 DA1 歳 8 ヶ月 認知・適応領域 DQ34 DA3 歳 4 ヶ月 言語・社会領域 DQ30 DA3 歳 0 ヶ月

【活動目的】

当初のねらい

1・ひらがなの読字の習得度を高め、文字による情報の習得する力を伸ばす。

対象児童は単語の頭文字や含まれている文字を、大まかに捉えて自分なりの解釈している様子が見られる。音韻に対する取り組みを行い、単語をより正確に理解する力を伸ばす取り組みを行う。

2・iPad を使用したテキスト入力50音のキーボードを使い、文字入力を学ぶ。

ひらがな打ちやスタンプを活用して、文字でのコミュニケーションの楽しさを学ぶことも試しながら取り組んでいく。そのことから文字やシンボルなどで思いを伝えることの有効性を感じ取っていく。

こちらからの質問では単語で答えられるような質問から始め、いずれは2語文やさらに文章として答えられるように質問を工夫しながら支援していく。対象児童は2語文以上で話すこともある。文字入力で伝える力も、会話でやり取りできているレベルを目指していく。

3・動画教材でできることを増やす。

図工、音楽での楽器演奏など、手指を使った操作に関する取り組み制作や楽器演奏の方法を主観の視点で作成した動画教材で学び、自立して制作したり楽器を演奏したりできる力を身につける。

・実施期間 2019年5月～2020年1月

・実施者 日置晋平

・実施者と対象児の関係 担任と児童

【活動内容と対象児の変化】

対象児の事前の状況

入学時より担任していた教員によると、入学時はひらがなも読めなかったとのことである。小1より文字の学習は、50音を一文字ずつ読む練習を始めている。読字に関しては、予想以上に習得が早く、小1の終わり頃にはひらがながほとんど読めるようになっていたとのことである。その後、書字の練習を始めたが、文字を固まりで読むなどの指導は特に行ってきていないとのことであった。

現在の学年(4年生)になった頃は書字に関してはひらがなで名前が書けていた。読字に関してはひらがなを一文字ずつならほぼ読めていた。しかし、「カレイのフライ」を「カレーライスとエビフライ」と読み間違えるなど、簡単な名詞などはざっくりと全体のイメージで理解している様子である。早口で滑舌も良くないが、簡単な会話を楽しめる。

活動の具体的内容

1・ひらがなの読字の習得度を高め、文字による情報の習得する力を伸ばす。

入力する際にひらがなの理解の弱さが感じられることがあった。そのためひらがなの理解を深めるためにアプリ「First word Japanese」を試してみたところ、対象児童も気に入って、集中して取り組んでいた。難易度を変える設定があるので、児童の習熟度に合わせて難易度を変更しながら取り組んでいった。



アプリ「First word Japanese」

2・iPad を使用したテキスト入力について

ひらがなで名前を書く練習を中心に、ひらがなの練習を行っているが、上達していくのには時間がかかっている。書字の練習に関して対象児童は意欲的なため、継続して取り組んでいく。

並行して文字を扱うことができるように、テキスト入力に取り組んでいくこととした。フリック入力を行うには、あ行～わ行の理解がまだ不十分であり、フリック入力を行うのは難しいため。iPad mini の画面で50音キーボードを使い、テキスト入力を行っていくこととした。

アプリ「えにっき」で印象に残ったことを記録する取り組みを行った。



アプリ「えにっき」

3・動画教材でできることを増やすについて。

図工の授業で、制作方法などの説明を動画教材で行った。動画教材は主観の視点で撮影することで、より理解しやすい工夫を行った。

楽器演奏での取り組みでは、居住地校交流で地域の小学校の4年生の合奏「オペラ座の怪人」にリコーダーと一緒に参加するという取り組みを行った。対象児童にとってはハードルの高い内容であり、期間も短い取り組みだったが、イントロの2音を家での自習も含めて動画を見ながら練習することに取り組んだ。

対象児の事後の変化

1・ひらがなの読字の習得度を高め、文字による情報の習得する力を伸ばす。

1月頃より授業中に説明で使用されているスライドにある文字などを、自分から読むことが増えてきた。この取り組みを始める前はそのようなことはなかった。単語や短い文などが読めるようになっており、理解できた上で近くの教員に確認を求めるように話しかけることが増えてきた。アプリ「First word Japanese」の取り組みでは、5～9月では1文字～2文字、文字の順番は自由に答えられる初期設定のまま使用させると、スムーズに解答できていた。しかし文字の順序を意識せず解答していることもあったので、9月より、正しく発音順に答える設定に変更した。はじめは間違えることもあったが、次第に順序を意識して解答するようになってきた。11月より3～4文字の問題が出題されるように変更した。12月より3～5文字までの言葉が出題される設定に変更し、取り組みを続けている。難易度を上げても対象児童はこのアプリが好きで、熱心に取り組みを続けていた。

2・iPad を使用したテキスト入力について

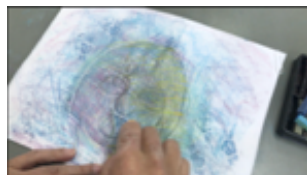


テキスト入力を実際に行ってみると、自分の名前などはひとりで入力することができている。しかし色々な文字を打ち込んでいけることが楽しい様子で、ランダムに入力し、意味のない文章を入力することが多かった。

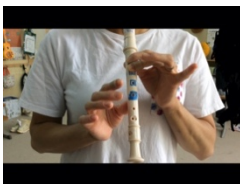
下の写真にある、アプリ「えにつき」に入力する際には入力する文章を相談し、内容が決まれば教員が、その文章を書き、児童に見せながら入力を行った。一文字ずつ二人で確認しながら入力した。

3・動画教材でできることを増やすについて。

対象児童にとって動画教材は理解しやすかった様子であり、説明が終わり教材を配布すると自主的に制作することが多くあった。木槌やアイロンなど危険な道具を使う授業では教員の介入が必要だが、手順は理解できていて、自分から率先して取り組むことができていた。日常生活の場面とは違う、図工の授業の中で、取り組みの一定の効果が感じられる。



作品制作の手順を、自分の視点で見ているかのように撮影した主観動画で視覚支援を行った。



リコーダーの練習用の動画の様子。

リコーダーは押さえっぱなしの穴には一部、セロテープでふさいでおいた。

動画教材以外の視覚支援では、プロジェクターで映した画像を頼りに合同制作で学習発表会の劇の背景画を描いた。その際には、自分からダイナミックに着色できた。また、タイトル表記などの細かい箇所をひとりで描くことができた。

リコーダーの取り組みは家での宿題が主だったが、学校でも少し取り組んでいる。その際の様子は動画を見ながら熱心に取り組んでいた。短い動画なので何度も再生しながら取り組んでおり、穴を押さえるタイミングはやや遅れるものの、タイミングに合わせようとしていた。音と映像から押さえるタイミングを判断しているので、どうしても遅れてしまう様子であった。家庭での様子は、母と一緒に練習に取り組んでおり、同じような様子であったと連絡帳からは読み取れた。居住地校交流の際は居住地校の同学年の児童たちと一緒に演奏できた。自信とやる気を持って演奏できた様子で、ワントンが遅れているが大きな音でリコーダーを吹いていた。



制作中の様子。大きく着色する箇所は自発的にダイナミックに着色していた。



プロジェクターで投影して掻き上げた。細かい箇所、文字は対象児童が担当した



プロジェクターの投影を外した写真。仕上がりの様子。

【報告者の気づきとエビデンス】

主観的気づき

1・ひらがなの読字の習得度を高め、文字による情報の習得する力を伸ばす。

文字を一文字ずつ確認しながら読むスピードは速くなった。登校後に給食メニューをチェックする時も読むのが正確になり速くなってきている。授業の中で出てきた文字を自分から読み、理解するなど日常生活の中で文字から情報を得ることが増えた。

2・iPad を使用したテキスト入力について

50音表の理解を伸ばす、あ行～わ行の並びを理解するという取り組みは並行して行っていたが、50音の中から入力する文字を探すのは時間がかかっている。そのため今後もこの取り組みも継続していく必要がある。

3・動画教材でできることを増やすについて。

動画教材や視覚支援の取り組みを行ってみて、対象児童に対しても有効な支援方法だと感じた。特に主観での動画教材は対象児童にとって理解しやすかった様子であり、スムーズに制作活動などを一人で進めることができていた。衣服の着脱やトイレなどは自立しているが、給食の準備や係活動ではまだまだ課題が残されている。そのような場面では口頭の指示でも活動できていることは多いが、動画教材を取り入れることで、より活動の精度を高めることが期待できる。

エビデンス

1・ひらがなの読字の習得度を高め、文字による情報の習得する力を伸ばす。

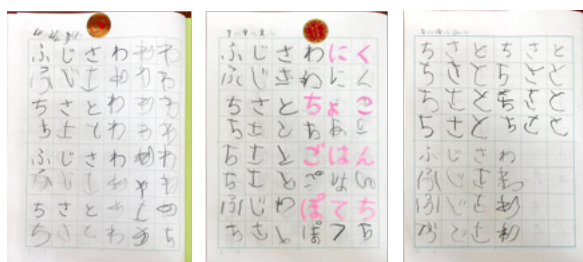
アプリ「First word Japanese」の取り組みでの変化の様子

5～9月	初期設定	「ねこ」などを「こ」→「ね」と順番を逆にすることもあったが、「『ね』からやって。」など言葉をかけるとやり直すことができていた。
9月～	2～4文字の出題 言葉を正しい順番に答えていかないと、文字が枠にはまらない設定に変更	文字数が増えても、それほど困った様子もなく、同じように取り組めた。文字を順番に正しく答えていかないとアプリに弾かれる設定なので、弾かれると自分で確認して入れることが増えてきた。
11月～	3～4文字の出題 言葉を正しい順番に答えていかないと、文字が枠にはまらない設定のまま	文字数が増えても同じように取り組んでいた。対象児童が知らない言葉や、色の名前などイラストから言葉がイメージしにくい問題の際に、イラストをタップすると、問題を再度読み上げてくれることを伝え、イラストをタップして一緒に確かめて答えることが増えてきた。
12月～	3～5文字の出題 言葉を正しい順番に答えていかないと、文字が枠にはまらない設定のまま	対象児童が知らない動物の名前や、馴染みの少ない言葉の出題が増えてきたことで、イラストをタップして確認することが増えてきた。言葉かけせずとも自分からタップして確認するようになってきた。支援をすることが減り、ひとりで取り組んでいることが多くなった。

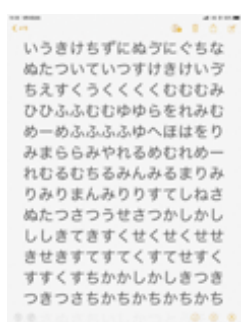
取り組み始めた頃は、対象児童にとって文字をはめるパズルのようなアプリであったのではないだろうか。しかし対象児童に合わせて細かく設定を変えていくことで、楽しいアプリでありながら学習として使えるアプリに変化していったと考えら

れる。対象児童はこのアプリを大変気に入って熱心に取り組んでいたが、それは取り組み始めた頃のパズル的な楽しさが持続したこと、「自分はこのアプリはできる。このアプリは得意。」と自己効力感を感じていたからと考えている。楽しさと正解することができることと、自信が失われることなく取り組めたことで、対象児童の音韻認識が向上していくことができたのではないかと考えている。

2・iPad を使用したテキスト入力について。



書字に関しての上達の進み具合は日常生活の中で実用できるレベルに達するにはまだ時間がかかると考えられる。しかし対象児童は熱心に取り組んでおり、今後も並行して取り組んでいく。



テキスト入力に関しては、現在は目的なく入力することが楽しい様子である。タブレットを使うのが楽しいという段階であると考えられる。

意味のある文章を入力する場合には、内容を一緒に考えて文章を書き、それを見ながら一緒に入力するなど、まだまだ支援が多く必要な段階である。しかしテキスト入力でも文字を書くことは理解できており、今後も取り組みを続けていくことで、単語や意味のある文章につなげていけることは可能かと考えられる。

3・動画教材でできることを増やすについて。

動画教材を使用することで理解が進みやすい場面が多く見られた。活動の手順を理解すると、自分から率先して取り組むことができていた。制作中に手順を忘れた際には簡単な口頭での言葉かけで手順を思い出し、制作を再開できることが多かった。

その他エピソード

12月にペルテス病と診断され、2月より入院することとなった。最低でも1年は入院生活が続くため、院内学級に転籍となった。転籍にともなう引き継ぎの中で、このプロジェクトでの取り組みの内容も引き継いでいる。